

学生部会の新しい試み

大西 勝也

人文学会の主な活動は「学会誌『人文研究』の刊行、学生部会誌『PLUSi』の刊行、研究会・講演会などの後援、学科祭活動の後援、学生活動の後援、HPの運営など」（人文学会HPより）であるように、学生会員による活動は、その大きな柱の一つといえる。この学生活動を組織的にリードするのが学生部会である（学生部会の歴史については、二〇一三年三月一九日刊行『PLUSi VOL.9』に記述（p.5）があるので、参照していただきたい）。私は、二〇一一年度より人文学会の常任委員をしているが、学生部会の学生たちの知性・感性・意欲にはいつも感心させられる。

ところで、学生部会の活動において、それまでにない新たな試みが行われることがある。

ここでは、昨年度と今年度にあつたそうした新しい試みを二つ紹介し、今後の学生部会の活動を支援していくだくようお願いしたい。

一つ目は、二〇一二年一二月一九日に行われた学生文化奨励賞表彰式における新しい試みである。以前から行われていた表彰式および懇談会に加えて、受賞学生による自作紹介のプレゼンテーションが初めて実施され

た。これにより、表彰式は、学生による文化創造的メッセージ発信の場になり、より充実したものになったと実感した。

二つ目は、一〇一三年一〇月一九日に本学セレストホールで開催された、人文学会創立六〇周年記念イベントのことである。このイベントは学生部会の学生に企画・運営された。こうした人文学会の記念イベントを学生が中心に行うことは、これまでにはなかった。テーマは、「「かたち」で伝える」というもので、第一部の「動き」で作る「かたち」「手話ダンスライブ」では、手話を取り入れたエンターテイメントグループ H A N D S I G N（メンバーの一人 SHINGOさんは神大OB）による手話で伝えるパフォーマンスが行われ、会場全体が生命力みなぎる空間と変容していった。第二部の「描写」で伝える「かたち」「対談」では、イラストレーターで本学外国語学部特任教授のわたせせいぞう先生、本学外国語学部准教授のジェームス・ウエルカーマー先生、そして、HANDSIGNのSHINGOさんによるイラスト・漫画での表現についての対談が行われ、「かたち」で伝えることの意味についてとても興味深い・刺激的な話を聞くことができた。この記念イベントは、学生部会の学生の尽力の賜物であることは確かであるが、また、それを熱心に支援してくれた人文学会常任委員の深澤先生の功績も大きいと思う。学生の主体的活動とそれを支援する教員との組み合わせが大切であると知らされた。

さて、以上、学生部会による二つの新しい試みを紹介したが、現在、学生部会のメンバーは四名と、以前に比べるとかなり少なくなっている。その活動内容は充実しているのだが、やはりそれを継承していく学生がないといい意味での本学の文化的伝統が消えてしまう。そうしたことがないように、強制的にではなく、学生

が自発的に活動できる環境をつくり、支援していくことが、課題として私たち人文学会常任委員をはじめとする教員に突きつけられているような気がする。